

MEMOIRS  
OF  
AN INVISIBLE MAN

# 透明人間の告白

H・F・セント

上

高見 浩 訳

Title : MEMOIRS OF AN INVISIBLE MAN

Author : H. F. Saint

Copyright © 1987 by H. F. Saint

Japanese language paperback rights arranged

with Georges Borchardt, Inc., New York

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

とう めい にん げん こく はく

## 透明人間の告白 (上)

新潮文庫



Published 1992 in Japan  
by Shinchosha Company

平成四年五月二十五日 発行  
平成四年六月二十五日 二刷

訳者 高見 浩ひろし

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三二六六―五一  
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Hiroshi Takami 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-237701-8 C0197

# 江苏工业学院图书馆

## 蔵明 冊間の章 白 上 卷

H・F・セイント

高 見 浩 訳

---

新 潮 社 版

4904



透明人間の告白  
上卷

## 主要登場人物

- ニック・ハロウェイ……………ウォール街の証券アナリスト
- アン・エプスタイン……………『ニューヨーク・タイムズ』の記者
- ロバート・キャリロン……………「公正な世界のための学生連合」代表
- バーナード・ワックス博士……………〈マイクロ・マグネティックス社〉社長
- デイヴィッド・ジェンキンズ……………秘密情報機関大佐。透明人間捕獲の責任者
- タイラー
- モリッシー } ……………ジェンキンズの部下
- クリラン }
- ゴメス }
- キャシー……………ニックの秘書
- アリス……………透明人間の恋人

いまの僕の姿を、ご覧いただければいいのだが。それはまずもって不可能なのだけれど、僕はまちがいないここにいます。僕の姿が見えない理由はあまりに陳腐だが、視覚的效果は魔術的だ。かりにいま、あなたがこの部屋に入ってきたとする。中はがらんとしているだろう——だれもすわっていない椅子と、白紙の束がのっているだけのデスク。だが、その紙の上にはペンが見えるはずだ。虚空に浮かんでいるそのペンは、ひとりで紙の上を動いてこの文章を書き記し、ときおり物思うように動きを止めて、宙に浮かんでいる。見た人はきつと呆氣にとられるか、でなければ慄然とするにちがいない。

悲しいことに、そのペンを握っているのはこの僕なのだ。もし僕よりも敏捷な人間がいたら、たぶん、僕をむんずとつかみ、その感触によってたしかめることができるだろう——肉眼では見えないという一事を除けばごくまっとうな人間が一人、この部屋にいるのだということ。人によってはさっと椅子をつかんで、僕をこっぴどく叩きのめすことも辞さないかもしれない。残念ながらこの有り様では、そういう結果を招いても不思議ではない。なぜなら、人間的にはごく平凡な男だとはいえ、いまの僕のありさまたるや奇怪もいいところだか

らだ。これではだれだって、好奇心を触発されるにきまつている。そして好奇心とは、かなり残酷な本能なのだ。いまの僕の暮らしは、じっさい、神経の安まることがない。最善の策はやっぱり、前へ前へと進みつつけることなのだろう。

本当のところ、この本は、ある透明人間の、“告白”ではなく、“冒険”と題したほうがいいのかもしれない。僕としては、自分の幼年時代とか、青春期の苦悩などについて、くどくど書くつもりは毛頭ないのである。それは、読者諸氏の場合とさしたる相違はないのだから。僕の知的、道徳的成長の詳細についても、論じる必要はないだろう。じっさいその種のエピソードは、これからお話しする、掛け値なしに面白く、かつ皮相な物語とはなんの関係もないのだ。それに、僕の精神的成長のプロセスを書いたところで、人間の本質に新たな照明をあてることにはならないと思う。僕にはわかつているのだ、あなた方が僕に興味を抱いているのは、僕の“病氣”のせいなのだということが。だとすれば、それ以前に起きたことなど、どうでもいいはずである。それ以前の三十四年間、僕は人さまとまったく変わらぬ生き方をしてきた。もちろん、僕個人にとって、それはそれなりに重要な意義を持っているのだけれど、でも、かといって、『ある証券アナリストの告白』などと題する本を面白がって読む方はまずいと思う。ともかく、事の発端は、僕のごく平凡な人生の途中で起きた、ある小規模ながら異常な科学的不祥事だったのだ。それが、ニュージャージーの地表のごく狭小な地域をまったく透明に変えてしまったのである。そして僕は、まさしくその決定的瞬間、偶然にも、その狭小な地表にいた。おかげで、すぐ周辺にあった事物もろとも、あつという



まに変身してしまった。ちょうど、ある有機体の構造が鉱物の分子の結晶に変わって化石となるように、僕の肉体もまた、ごく微小なエネルギー物質から成る特異な構造体になっちゃった。その機能はまったく以前と変わらず、これまでに確認したかぎり、相違点はわずかしかない。が、ともかくも、肉眼ではまったく見えない体になっちゃったのである。

肝心なのは、あの場合、僕以外のだれでもああいう目にあう可能性があったという点だ。もちろん、われわれはひとりひとり——雪片や木の葉のように——自分だけの特色を備えていることは、僕だって承知している。ただ、そういう特色があるからといって、さほど形而上<sup>じょう上</sup>的な満足感を覚えることもないのではなからうか。いずれにせよ、あなたではなく僕がこういう運命にあったのは、僕ならではの個性のせいではなかったことはたしかである。つまりは宇宙のサイコロが、とんでもない目をだしてしまったということなのだろう。あのとき神の目は、疑いもなく一羽のスズメに注がれていたのにちがいない。

僕の目はといえば、主としてアン・エプスタインと、彼女の魅力的な胸に注がれていた。彼女が身じろぎするたびに、その胸はシルクのブラウスに優しく撫<sup>な</sup>でられていた。青みがかったグリーンの生地<sup>きじ</sup>をとおして、乳首の形がはつきり見てとれたし、彼女がむきを変えて電車の窓から外を見ようとすると、シャツが引っぱられて、ボタンとボタンのあいだの隙間<sup>すきま</sup>から、雪のように白い肌<sup>はだ</sup>までかいま見えたのだ。あの運命の朝——と呼ぶのがふさわしいだろう——僕とアン・エプスタインは、ニューヨークからプリンストンにむかう電車の車中にいた。いまにして思うと、あの朝は、黒い雨雲が張りだしたと思うと一転して四月の明るい陽

光がふり注ぐというふうで、たしかに不吉な前兆らしきものを孕<sup>はら</sup>んでいた。けれども、あのときの僕は、もっぱら陽光しか意識になかったのだった。前夜の飲みすぎによる睡眠不足のため、なにかしら夢見るような陶然とした気分に使<sup>つか</sup>まれており、その夢見心地はいずれ激しい頭痛と睡眠への渴望<sup>かつぼう</sup>に変わることは体験からわかつていたのに、あのときの僕はただひたすら、輝かしい春の陽光とアン・エプスタインのしっとりとした白い肌に酔っていたのである。

方向がちやうど朝のラッシュと逆だったせいだろう、オンボロの電車にはわれわれ二人しか乗っていないかった。シートは、回転させて向かい合わせにできる式のやつだったから、僕はすぐにそうして、彼女と向き合ってすわっていた。足元にはほとんど余裕はなかった。そういう形ですわるのは、子供の頃<sup>ころ</sup>、学校の休暇がはじまるたびに、あの素晴らしい汽車の長旅で家に帰ったとき以来だった。その連想が、自分はいまいい加減な口実で仕事をサボっているのだという意識とあいまって、ある種子供じみた、ひそかな快感を生んでいたのだと思う。アン・エプスタインは左腕を頭の上のせてシートにもたれかかっていたため、シルクのブラウスが胸の上に張りつめていた。僕はさりげなく右手をのばして、彼女の脇腹<sup>わきばら</sup>からヒップにかけてそつと撫でさすった。アンはあいかわらずしゃべりつづけていたけれども、その顔には迷惑そうな表情と快感とが、同時に浮かんでいたような気がする。

アンはそのとき、なにを話していたんだっけ？ たしか膝<sup>ひざ</sup>の上に、『ニューヨーク・タイムズ』を広げていたはずだ——アンは『ニューヨーク・タイムズ』の記者だったのである。

——そして、あの頃の彼女の重大関心事について述べたてていた。それは、中西部のどこかの地区の選挙区の改編にまつわる話題だったと思う。そこでは例の二大政党が幅をきかせていたのだが、そのうちの一つ——もしくは両方——が、派閥争いをしていた。そして一方の派閥が、ライヴァル政党を利用する危険もかえりみず、敵の派閥に打撃を与えようと画策し、選挙区改編を支持するならばという条件つきで、ある特定少数民族グループに特別の便宜を図ってやっている、というような内容だった。それがなぜ重要かといえ、そうして浮かびあがった少数民族グループと党と派閥の組合わせの構図が前例を見ないものであるため、国政レベルにも変化を及ぼす可能性があるからなのだそう。

僕に言わせれば、そいつは盗賊どもが新たな分配の取り決めをしているようなものだが、僕という人間はもともと、政治くらい退屈で下劣な営みはないと思っている男なのだ。それに対してアンは、政治こそ人間の思想と行動が真の意義を持ち得る唯一の分野だと見なしていた。だから僕は、せいぜい眉をしかつめらしく寄せて、真剣に耳を傾けているふうを装っていた。ときおりもつともらしく相槌を打ったりもしたけれども、アンの声は、僕の気分と同じく、ひたすら心地よい夢みるような響きを伴なって耳をかすめすぎてしまふにすぎなかった。その頃になると、窓外には黒雲がとんでいたような気がする。僕は適当な頃合いを見はからって、さも真剣そうな声で、どうでもいいような質問を投げかけた。アンの口調は、しゃべるにつれていよいよ熱気を帯びていった。彼女はきわだった美貌の主で、政治の話をしはじめると表情が険しくなるのだが、それがかえってチャーミングに見えてしまふ。肩に

かかる茶色い髪ときりつとした服装は、どこにいても、うまくその場に融けこんでしまうようだ。新聞記者というより、テレビの夜のニュース番組の女性キャスターといったほうが、はるかに似合いだった。そのうちアンは、上体を前に傾けると、膝の新聞の下に窮屈そうに組んでいた、長い、ほとんど裸にちかい脚の一方をおろして、僕の隣りのシートにのせた。話に夢中になると、右手の人差し指と中指を合わせてふり、とくに強調したいくだりにさしかかると、しなやかな指で新聞を叩きながら、口を歪めて、皮肉っぽい微笑を浮かべる。そして、同意を求めるようにこちらの目をのぞきこむのだ。僕の頭と心は、彼女の主張に対する関心こそ持続できなかった代り、彼女自身に対する関心でいっぱいだった。それほど美しかったのである、アン・エプスタインは。

彼女にはユーモアのセンスもあった——ときどきは、自分自身をも笑いの種子にしたりした。だから、なんとか政治談義をしのげば、話題を別の方向にそらせ得るということも、僕は知っていた。が、それにはかなり微妙なテクニクを必要とする。きょうのところは徐々に話題の軌道をずらしていく手でいこうと、そのとき僕は決めた。それでどうしたかと言えば、その日の経済欄の記事に関して、思いつくかぎり最高にややっこしい質問を投げかけてみたのである。それに対する回答は政治ニュースなどよりずっと面白いだろうし、答える側のアン自身も、きっと喜ぶだろうと思った。というのも、彼女にとって政治に劣らず重要なものはただ一つ、自分の出世しかないのだが、彼女はそのとき、経済部に配転になったばかりだったのだ。その前にいたのは運動部で、主としてプロ・バスケットボールを担当してい

た。その前はエール大学で四年学んだのだが、僕の見るところ、その間にバスケットボールの試合を観戦したことは一度もないはずだし、ビジネスや経済学にすこしでも関係のある知識を仕入れたことも、ただの一度もないはずだった。

が、実のところ、そのときわれわれがそうやって膝を突き合わせていられたのも、元はいえ、彼女の受けた教育と、『ニューヨーク・タイムズ』紙の不可解な人事政策のギャップのおかげだったと言っている。僕があるディナーの席で彼女と隣り合わせたのは、その日からさかのぼること一週間あまり前の晩だった。それに先だつ数年間にお互いに紹介されたことが一、二度あったとはいえ、こちらの職業などアンはまるで覚えておらず、あらためて問いかけてきたのだった。僕のほうも、目のさめるような美貌の彼女を前にして、ごくまっとうな受け答えをしていたところを見ると、最初はさほど心を奪われたわけではなかったらしい。だいたい、自分は証券アナリストです、などと名のつたりすれば、相手はとたんにそろそろと周囲を見まわしはじめ、どこかに逃げ場はないか、だれか代りに話し相手になってくれる人間はいないか、と捜しはじめるにきまつている。社交上の不人気度ということ、言え、僕の職業は化学技師とどっこいどっこいというところだろう。が、驚いたことに、アンは山のような質問をこちらに浴びせてきたのだ。もちろん、經濟部に配転になったばかりだったせいだろう。仕事に役立ちそうな情報源を前にして、それとおそらくは自分のフィアンセに焼きもちをやかせるために——愛の起源は複雑にして神秘的なのだ——アンは僕の腕に手をかけ、蠱惑的こわくな笑みを浮かべてこちらの目を真向からのぞきこみながら、ビジネス

と経済学に関する質問をつぎつぎに投げかけてきたのだった。質問の内容が内容だから、その場の雰囲気はおよそロマンスとは無縁だっただろう、とだれしも思うにちがいない。でも、こちらを見つめるアンの視線の、なんとひたむきだったことか。彼女は、相手が答えたがるような問をわざと発して相手をいい気持にさせる、あの、新聞記者ならではのテクニクを備えていたのである。それに、とにかく、あの晩のアンの美しいことといったらなかった。

僕がたちまちのうちに、男ならだれでも抱く感情と欲望に圧倒されてしまったことは言うまでもない。次の週は、アン以外のことなどほとんど考えられないありさまだった。なんとか彼女をランチに誘おう、飲みに誘おう、夕食に誘おう、考えることはそれだけだった。しかもアンときたら、肝心なところで身をかわすのが実に巧みで、せいぜい二、三時間しかつき合ってくれない。理由は仕事であり、私生活の制約だった。たしかに彼女は無類に勤勉で、野心家でもあった。その私生活に関しては、おせっかいと思われない程度に熱心な興味を、僕は露わにした。アンには友人、もしくはフィアンセ、もしくは「あたしのごく近い人」がいて——彼の役割は絶えず変わるようだった——彼女とその男性のあいだには、ある種の感情のもつれ、ないし誤解が存在していたらしい。が、彼女自身、実に氣むずかしいところがあつて、それがかえって稀有な美貌を引きだてていたのも事実だと言つていいだろう。なにしろアンときたら、肝心なときになるとさつと立ちあがつてさよならを言う特技を持つてゐるのだ——そのときは必ずこちらの目を真向から覗きこみ、あのうつとりするような笑みで僕をノックアウトしていくのである。（そういえば、いまや僕の目を真向から覗きこむ

ことはだれにもできはしない。ごく稀に、周囲に人がいない頃合いを見はからって、僕がいと覺しい空間にむかつて曖昧に微笑む人間がいることはいるが。その反面、僕といふときの彼女は、きまつて、ひたむきに僕を見つめ、こちらの一言一句に耳を傾けるのが常だった。アンは僕に質問を投げるのが好きだった。そして、答が長ければ長いほどご満悦なようすだった。運動部に移ってからすごいバスケットボール通になったように、アンはそのとき、ビジネスや経済学に関する興味ある事実や理論や意見を、手当りしだいにものにしようとしていたのである。

彼女の貪欲な質問攻勢にさらされるのは、僕にとっても楽しかった。自分の得意なジャンルに關することを訊かれて、楽しくない人間がいるだろうか？ もっとも、アンの頭の中では関心度の順が逆になっていて、その点が氣になったのは事実である——つまり、いちばん興味があるのが“意見”であり、“理論”が大差の二位、そして“事実”に対する関心は、ほんのお飾り程度にすぎなかった——が、それはたぶん、彼女の上司が求める優先順位でもあったのだらう。とびきり聡明なうえに意欲満々のアンのことだから、たちまちのうちに相当量の情報を仕込んでしまった。僕はくり返しその点を賞讃したのだけれど、彼女はそのたびに上機嫌だった。僕はといえば、彼女の飽くなき知識欲、氣むずかしい性格、すらりとした肢体、そして僕の腕にかける白い手、にひたすら魅了されていた。その合間に、適当に思いつく問を投げ、彼女の答に、辛抱強く、興味津々と聴き入った。彼女の仕事について、野心について、友人たちについて、僕は訊いた。自分と寝てくれともたのんだ。さりげなく

裸の腕を撫でては、たまたま頭に浮かんだ問を口にした。要するに、アンの形のよい口とふくらとした唇が動くさまに見入っていれば、それでよかったのだ。

そしてあの日、ニュージャージーに向かう電車の中で、僕は、隣りのシートにのっているすんなりとした彼女のくるぶしに右手の指を這わせた。アンはじっとしている。くるぶしから長いふくらはぎに、僕は指を移動させた。そこからこんどは膝の上に、さらに太ももにそってすべらせていった。親指と他の四指を広げて這わせていたので、親指は太ももから新聞の下へ、さらにスカートの下にもぐって、その奥にまで達した。

そのときになってようやくアンは身をよじり、シートにのせていた脚をもう一方の脚の上に組んで、こちらの手をしめだした。その口元には、ごくかすかに、すねたような表情が浮かんでいたように思う。

「昨夜のことだけど」アンは言った。「あれはまちがってたわ」

昨夜は、数時間の睡眠をとったにもかかわらず、これという明瞭な区切りがなく、なんとなく朝にもつれこんでしまったような塩梅だったのだが、われわれ二人にとっては記念すべき一夜だったのである。昨夜、僕とアンは初めて——そして結果的には最後の——セックスをしたのだ。七日間にわたるランチ、ディナー、酒、追従、懇願、愛撫、微笑、そして説得がとうとう効を奏して、イースト・リヴァーを見おろす彼女のベッドの中で結実した。それなのに、いまの彼女の一言は、悩ましくも甘美な戦いの再開と、貴重な陣地を再奪取する必要性を、示唆しているようではないか。僕の胸にはたちまち、期待と苛立ちの入りまじった



感情が押し寄せた。

「どこがまちがってたんだい？」僕はたずねた。

「だって、ピーターに悪いんですもの」

ピーターとは、彼女のフィアンセ、もしくは友人かなにかのことである。数年前から、僕も顔くらいは見知っていた。感じのいい男だが、少々退屈な人間のようにも思われた。もつとも、それを言えば、僕だってたいていの人から「少々退屈な人間」に見られていたことだろう（結局、アンは最後にはピーターと結婚したのだから、この自覚は当たっているはずだ）。「正直なところ、ぼくはまだピーターに対して、フェアプレイの精神で当るつもりはないんだな」

それを聞いて、アンはムツとしたらしい。体が急に強<sup>こわ</sup>ばるのがわかった。

「あたしはあるわ。言っときますけど、もし相手があたしであれ、ほかのだれであれ、あなたが真剣に付合おうという気がないのなら——」

「わかった、きみの言うとおりでだよ」僕はさえぎった。「どうして変なことを言っちゃったのかな。きつと、氣落ちしたせいだな。氣恥しさもあったんだ。この老骨<sup>やうこつ</sup>の胸にいやおうなく湧<sup>わ</sup>きあがるもろもろの感情や情熱を、他人やぼく自身から隠したかったんだ」僕は芝居がかった仕草で、自分の胸を人差し指で軽く叩いた。アンが奇妙な目つきでこちらを見る。「それに、もちろん、良心の呵責<sup>かしやく</sup>もあったよ。抑えがたい良心の呵責がね。それがすべて、このピエロの善良そうな外面の下に隠されてるってわけさ」